

平成十五（二〇〇三）年度

建仁寺護国院の建築及び障壁面の調査研究報告

永井規男
山岡泰造
中谷伸生

建仁寺護国院調査研究班

建仁寺護国院開山堂の調査研究について

建仁寺護国院開山堂の建築及び障壁面の調査研究は、平成十三年から十五年にかけて、関西大学工学部の永井規男（建築史）、文学部の山岡泰造（美術史）、中谷伸生（美術史）及び建仁寺調査研究班の大学院生、福井麻純、西垣香、福井博教、樋上将之が参加して行った。護国院開山堂の建築及び障壁面は、これまで部分的に紹介がなされたことがあるが、その大半は未紹介のものである。再三の調査をお許し頂いた建仁寺当局に感謝を申し上げる。

〈論文・資料紹介〉

建仁寺護国院開山堂の歴史と建築

永井規男

建仁寺護国院開山堂の障壁面（上）

中谷伸生

〈資料〉

護国院開山堂平面図・障壁面記号・図版

護国院の客殿建築

永井規男

一 護国院と玉龍院

護国院は建仁寺の開山塔院で正しくは興禪護国院という。この論稿はこの護国院に現存している客殿建築をあつかうものであるが、現在の護国院客殿は妙心寺塔頭玉龍院客殿を移築したものである。したがってその建築の背景を論じておこうとすると、護国院と玉龍院の双方について言及することになる。そのため論議が並行的なものになり、また錯綜することをはじめにお断りしておきたい。

建仁寺護国院 護国院は健保三年(一一二五)示寂の開山明庵栄西禪師の塔院で、建仁寺の三門の東方、地形が一段高くなつた敷地に所在している(図一)。その位置は創設以来変わっていないと考えられる。すくなくとも一三六〇年代の状況を示すものとされる「東山往古之図」^①では現位置に所在しており、「中古之図」・「近代之図」においても変わることはない。文献上では『統史愚抄』に、曆応三年(一一三九)十月七日に建仁寺の輪藏・開山塔・瑞光庵等が罹災したとある。これが開山塔の史料上の初出であろう。ついで永和三年(一一三七)、細川頼之の施財により護国院の改造が行われている(『東山建仁略寺誌』)。応永四年(一一三九)十一月十八日に開山塔は火災に罹つたが、靈源院一庵一隣(一一四〇九年示寂)によつて再興された(「一庵行状」)。しかしこれも永享七年(一二三五)に焼失したようである。すなわち『師卿記』永享七年十一月

二十九日条に

未刻建仁寺塔頭炎上、寺中七堂以下免余炎了、所焼失塔頭數十云々とあり、このとき開山塔も焼けたと思われる。康正元年(一二四五)、建仁寺は朝鮮国に勸化して三門・開山塔・経藏の建立を図つたという。開山塔はこの事業によつて再建されたであろう。降つて『蔭涼軒日録』の天文七年(一五六四)十一月二日条に、

建仁寺開山塔護国院修理、以聖福寺公文十員分、自当年申歲至巳歲限十箇年可有御免許之由。

とあり、博多聖福寺の坐公文十員分の十ヶ年の相当額を充てて護国院の修理が図られている。開山塔・護国院という書きかたから推すと、開山塔とともに付属する客殿建築が存在していたと推測できる。ところが天文二十一年(一五五二)十一月、西門前から出火して、方丈・寢堂・法堂・仏殿・五頭首寮・維那寮・三門・僧堂らとともに開山塔は焼亡してしまふ。そこで翌年、唯一焼け残つていた塔頭瑞光庵を移して開山塔としたという。この瑞光庵は前記の曆応三年の火災後に再建されたものである。このあと開山塔は明治までそのまま存続していらしい。というのは近世の寺史に開山塔の火災のことが現れないこと、また護国院にある経藏の明治十八年の棟札に

天文兵燹之日独免其灾於是一衆議移之於本院充昭堂前後曆年殆五百七十余歲尊其古致可觀也

とあるからである。この経藏の実物をみると、花頭窓は頭部に鏝をもたない古様さを見せ、柱は太く古びている。これらは室町前期を下らないと考えられるものである。このち慶長三年(一五九八)、前年の大地震

で被害を蒙った開山塔の修理が、細川右京兆（幽齋）によって他の諸堂宇とともに施され、ついで元和元年（一六二五）、護国院の客殿が建てられている。^⑥「口水集」に慶長十三年（一六〇八）十月に梅仙東逋が護国院の「正寝」において示寂とあるので、元和元年以前にも方丈（客殿）があつたことが知られる。元和造営の客殿は江戸時代を通じて存続したようであるが、この間の経緯は明らかでない。ただ寺地画図（図二）から、幕末・明治初期の様子を知ることができる。これによると護国院は開山堂・文殊堂（僧堂）・客殿・庫裏の三者から構成されていた。その客殿と庫裏は一棟に合体したものであつた。現状は客殿と庫裏は別棟であり、文殊堂はなくなっている。開山堂は全面一間通りを吹放にしている、嵐山臨川寺の三合院開山堂と似たかたちをとっていたようである。この客殿もおそらく壊廃が著しかったのであろう、明治十年（一八七七）に妙心寺玉龍院の客殿（方丈）・玄関が購入され、その客殿が護国院客殿として再建されてこれに代えられた。なお玄関は建仁寺大方丈の玄関として再建され、これも現存している。さらに付言しておく、護国院の中心である開山塔は明治十七年（一八八四）に新規に建替えられたもので、開山祠堂・相の間・礼堂からなる複合建築である。相の間の中央に石壇を築いた開山の入定塔がある。明治十六年二月、護国院および矢ノ根門の二棟の修繕費として二百円が内務省から与えられており（寺院調査書）、おそらくこれを基金にして開山塔の建替えがなされたのであろう。このとき旧開山堂の昭堂が経蔵に転用されたとされるのであるが、経蔵は方丈二間の大きさ、現開山祠堂も方丈二間であるから、この移築である可能性がおおきい。護国院の山門は「宝陀閣」といい、開山堂竣工翌年に鳴

滝の妙光寺から移築されたものである。^⑥近世における比較的小規模な禅宗寺院における三門の例としていまでは貴重な遺構である。このように護国院の建築物の半分は移築によつたものであるが、他から建物を移して再用することは中・近世ではよくあることであつた。

妙心寺玉龍院 つぎは玉龍院についてである。玉龍院は妙心寺境内西端に現存する塔頭寺院である。慶長三年（一五九八）、豊臣家の中老であつた生駒讀岐守一正を開基檀越として創立された。織田系図（『統群書類従六下』百四十二）によると、織田信長の妹を母とする津田忠辰（慶長十八年卒）とその妻（慶長六年卒）が玉龍院に葬られており、津田氏との関わりも密なものがあつた。元和二年（一六一六）に建て直しがなされ、檜造りで金箔があしらわれた方丈が建てられた。^⑦しかしこれは寛政十年（一七九八）正月に庫裏とともに焼失してしまつた。しかしその再建は文化二年（一八〇五）までに果たされた。すなわち表門棟札に

庫司函丈再建之時、從南遷此而修補重而利七福即在七難即滅諸縁者

文化第二乙丑歲五月十一日 現住比丘口口慧行謹識 大工木本喜兵

衛 葺師総左衛門

とあり、文化二年の五月に庫裏・方丈の再建にあつて表門を南より現在地に移し修理を加えていて、このころ庫裏・方丈が再建されていることが知られるのである。また庫裏の鬼瓦には享和三年（一八〇三）五月の刻銘があり、庫裏はこのころまでに建つていたらしい。庫裏は方丈より先に建てるのが普通であるから、方丈すなわち客殿は享和三年から文

化二年の間に建つたと考えてよい。この客殿が護国院に移築されるわけである。玉龍院時代の様子は天保十四年の塔頭新絵図から知ることができ、それは桁行九間、梁行六間半、瓦葺で、折曲り六間の大玄関が付いているものであった。

二 護国院客殿 (図三)

概要 桁行 二〇・二七七m (六六〇・九五七尺)、梁行一〇・九一m (三六〇・〇七尺)、単層、入母屋造、棧瓦葺、南面
文化二年(一八〇五)ころ

前述したようにこの建築は文化二年(一八〇五)ころに妙心寺玉龍院の客殿として建立された。そして、明治十年に建仁寺に売却され、同十三年(一八八〇)に護国院客殿として再建されたのである。前後各三室からなる方丈型六間取りで、正面に吹放しの広縁に落縁を、両側面は幅一間半の入側の鞘の間、背面に半間の濡縁をつけるという構成をとる。そして広縁の東端において開山堂昭堂への渡廊下が取り付き、西入側の北寄りに玄関が付き、東入側の北寄りには庫裏への廊下が取り付いている。

内部の間取り構成は、中央前面に十五畳大の畳を廻し敷きとする枳板敷の室中、その後ろに十二畳大の仏間、これらをはさむ左右の前後にそれぞれ十畳と八畳を配するというものである。前三室は通し天井とし、室境に竹の節欄間を設けている。仏間は前一間通を枳板敷、その奥を半

間の通し前壇とし、さらに奥に一段高く背面に沿う仏壇を構えている。仏壇の前面は板壁で左右中央の三箇所花頭口を開き、中央に本尊釈迦如来立像は安置し、左右を位牌壇とする。背後の左右二室はともに床の間や付書院をつくらず、天井も低い簡素な構成になっている。正面の広縁は一間幅で化粧屋根裏天井。左端には杉戸を引違いにたてるが、右端は板壁とし孔雀の彩色画を画いている。この広縁を囲むようにして広縁まわりだけに落縁がまわされている。左右側面は幅一間半の入側の間となつてゐる。しかし上方は広縁の構成をのこして、半間内側に化粧軒桁を通しそれを繫虹梁で支え、天井は内一間通りを鏡天井、側寄りには化粧屋根裏となる。立面の構成は正面広縁入側と背面は柱頂に舟肘木を組み、内法貫・飛貫を通し固めるもので、これに縁長押、内法長押がつく。ただし正面だけに飛長押を付けている。両入側部は鏡天井とするため舟肘木はなく天井長押がこれにかわる。室内部は前後とも蟻壁をまわし、前室は飛長押がまわり、後室は天井が低いためこれが省略される。仏間は仏壇部をのぞき猿頬の棹縁天井で、仏壇境は丸柱に虹梁形頭貫、台輪、出三斗、中備え暮股と、仏堂形式にしている。

柱間装置についていうと、室側廻りは舞良戸と明障子の組合せ(明障子が中央にあり、舞良戸に挟まれる)で、室境は襖建てである。室中正面中央間は型のとおり双折棧唐戸と内側の明障子四本で構成される。なお棧唐戸の軸は上は藁座に、下は敷居の孔に納まっている。左右の入側の外回りは内法にはマグサをいれ下は板戸と明障子、上の欄間は板格子と明障子を建てている。柱は六寸角で、木割は太い。

玉龍院時代との比較

当客殿を玉龍院にあった時のものと比較し若干の検討をしておこう。妙心寺塔頭の建築構成については天明絵図と天保新絵図がよい資料になるが、玉龍院についてはさいわい両者とも伝えられている。そのうえ偶然であることに、玉龍院の場合、前者が寛政十年の火災以前を、新絵図が火災後の再建以降の様子を画いたことになるのである。さて天明絵図(図四)では、客殿と庫裏は東西に並置され(この配置形式は妙心寺塔頭の多数が取る南北並置形式—筆者はこれを本庵型と呼んでいる—と違うもので、本庵型が一般化する以前の古型を見せるものと考えている)、客殿は桁行十間、梁行八間半の柿葺建物で折れ曲がり五間、梁間一間半の玄関を付属させている。一方、天保の新絵図(図五)では客殿と庫裏は南と北に棟を平行にして配置され、客殿は桁行九間、梁行六間半の瓦葺で、折れ曲がり六間で、梁間二間の柿葺の大玄関を付属させている。大玄関といっているのは客殿と庫裏を結ぶ廊下に小玄関を設けるようになったからである。玉龍院客殿のこうした変化は、禅院客殿の前期的な様相と後期的な様相の違いをまざまざと見せるもので、現客殿が後期的なもの、の好例といえることをまず指摘しておきたい。客殿内部の間取りは、明治四年の寺地画図(図四)から伺うことができる。

さて、玉龍院における再建客殿の規模は桁行九間、梁行六間半である。これを護国院客殿と比較してみよう。護国院客殿の現状は桁行十間、梁行五間半である。天保絵図と比べて桁行で一間長く、梁行で一間短い。これらをどのように解釈するかは難問であるが、すくなくとも寺地画図

が画く上下間の前後室の広さは護国院客殿と一致している。中央の室の幅は寺地画図では分らないのであるが、桁行九間から上下間の室幅各二間を引いたのこり五間は室中幅と左右の広縁と考えられ、左右広縁幅を一間とすると室中幅は三間となる。これは現護国院客殿の左右の入口をその構造形式にしたがい半間の化粧屋根裏部分を除いて勘定したものと一致する。すなわち桁行き長さに関しては天保絵図と現護国院客殿は合致するわけである。しかし梁行の数値に関しては説明が困難である。玉龍院時代の客殿には背面に一間の広縁があつたとするか(しかし絵図はそのようには画かれていない)、六間半は五間半の誤記であるかであるが、決着はつけがたい。ただ寺地画図によるかぎり、もともと五間半であつた可能性が大きい。しかしこの問題については後考にまらしたい。

また移築されたことに伴う改造もあつた筈であるが精査していないので明確にはできない。ただ玉龍院時代の客殿は広縁の東側に玄関を付属させていたから、現在広縁の東端の孔雀を描いた板壁は、玉龍院時代にあつたものだとしても、この場所ではなかつたことは指摘できる。なお正面広縁の端部の一方を板壁とする例は、妙心寺では玉鳳院御殿、大心院客殿などに見ることができ、前者では同様に孔雀が画かれている。仏壇の堂風な構え方も移築後の変更によるものであろう。また室中の幅が三間であるのは、禅院の方丈建築としては例がすくなく、異例というべきである。そのため左右の柱間が五尺二寸五分という垂木の枝割とも合わない半端な数値となつている。護国院前客殿の中央間の室幅が三間であつたから、移築した客殿をこれに合わせて室中幅をすこし縮めたかとも考えられもするが、部材には縮めたという形跡は認めがたいのである。

もともと大名塔頭客殿であったものを開山塔客殿に転用したわけであるが、そこに大きな無理や矛盾が生じているとも見えない。このことは近世中後期における方丈建築の汎用的性格、見方を変えれば無性格化への傾向を物語るものであろう。確立した左右対称の平面構成、左右広縁のほぼ完全な狭屋の間化は近世後期型の方丈建築の一典型を見せるものである。

註

① 太田博太郎『中世の建築』五山建築 建仁寺の項を参看。以降の「東山中古之図」・「東山近代之図」もすべて現位置を示している。

② 建仁寺所蔵「寺院調査書」による。これは明治二十八年に作成されたもので、典拠を明示していないが、語録などに依拠しているようでありその内容はほぼ信頼にたるものである。

朝鮮国勸化のことは『蔭涼軒日録』長祿二年（一四五八）二月から五月の諸条や『如是院年代記』などに見えるが、そこでの造営対象は明らかではない。

③ 『玄圃藁』・『東山建仁略寺誌』・「寺院調査書」などによる。「寺院調査書」では天文二十一年十月の火災について

西門前出火引テ、方丈・寢堂・法堂・仏殿・五頭首寮・維那寮・山門・僧堂・開山塔及東ノ塔頭焼亡。

とし、さらに同年十一月の火災について

同年十一月、細川晴元ノ兵火ノ為メ、南谷塔頭及ヒ三重塔焼失、此二至テ

一山悉ク烏有二歸ス。僅カ二火ヲ免ルルモノ瑞光庵・経蔵・鐘樓・矢ノ根門ノミ。とし、瑞光庵の開山塔移築については

同十二年、東福寺ノ茶堂ヲヒ移ケ法堂トナシ、瑞光庵ヲ移シテ開山塔トス。と記している。天文の火災については他の史料と照らして、ほぼ事実を伝えていると見られる。『玄圃藁』（南禅寺聴松院玄圃和堂の語録）によれば、十一月の火災は十四日に起こったものである。瑞光庵については『東山建仁略寺志』瑞光庵（開基）の項に「天文の火後、影堂を移して護国の塔宇と作し、瑞光・光沢を合して一字となす」とある。『扶桑五山記』四によると瑞光庵は環溪派に属し、南宋西蜀から渡日した鏡堂覚円（一三〇六示寂）を始祖とする塔頭であった。その所在地は正伝院の旧地の東南の方角にあった（東山往古之図）。その影堂すなわち覚円鏡堂の開山堂を移して、護国院開山堂としたというのである。そして明治十八年に開山塔を建て直したとき、かつて本山の大方丈前庭西隅にあつて天保八年に焼失した経蔵を元の昭堂の古材を使つて護国院内に再建した（「寺院調査書」）。いま護国院山門の東南に建つ方二間の小堂がこれである。柱材や花頭窓は古様を示し、明らかに天文以前おそらくは室町前期に遡りうる古さをもつ。もとの状態を知りえないのは惜しいが、それでも総門（矢の根門）とともに建仁寺の中世を物語る貴重な遺構であるといえよう。なお光沢は広澤庵のことで瑞光庵と同じ環溪派に属し、安井神社の北辺に所在していた。

④ 経蔵棟札銘の全文を掲げておく。

吾山嘗秘麗本毘盧大藏尊經者久矣、天保丁酉之秋不幸罹祝融之厄有故得免者僅四十有余函耳、爾來無經庫之設可謂欠典矣、今適際祖堂改築之日而旧堂者瑞光円鏡堂ノ之影堂也、天文兵燹之日独免其災於是一衆 議移之於本院充昭堂前後曆年殆五ノ百七十餘歲尊其古致可觀也、清住前主塔鄴林東堂慨旧貫之無可徵于

後憤然自捐衣資／輯其故材建茲新庫繼絶起廢之功、可謂偉矣、仍架麗藏之殘函
且備大日本校訂明治縮／刷之大藏經以補欠典温故知新之業謂完矣、茲貨上梁之
辰聊記梗概貽厥將來系之以／銘々曰、

東山左辺 道樹繁茂 中有黄金 充塞宇宙 仰願

皇基鞏固 法輪常転 明治十六龍輶癸未八月吉辰 住山比丘球石窓 欽叙

(裏面) 工匠 坂田清次郎建焉

⑤ 元和二年の護国院方丈造営のことは「口水集」につきのように見える。

(前略) 故王府一衆胥議而欲口建護国丈室、雖然聊無募縁祖越、於是折靈松

枝桶代菩提樹架口之 以護国一林脩竹 堅祖塔四面垣口集以成一宇輪奐漸

欲美 因賦俚語祇夜以代奇文梁猪云、

護国塔前宮丈方 千光玉座又添光 雲斤月斧尽工処 入五百員獅子床

⑥ 当図は建仁寺所蔵

⑦ 古都巡礼京都6 『建仁寺』昭和五十一年、近藤豊の建築解説参照

⑧ 『生駒家宝簡集』所載の生駒正俊書状(『新修高松市史1』所収による)

一、ミヤうしんじのてら ひの木方木ふしなしにあたらしくたてなおいし 金

のすなごもミばくに可仕候 くりげんくわん門いかにもねんの入可申付候

しどうせんいま少之合可付候 か様之儀以来子どもくわいぶんにて候条い

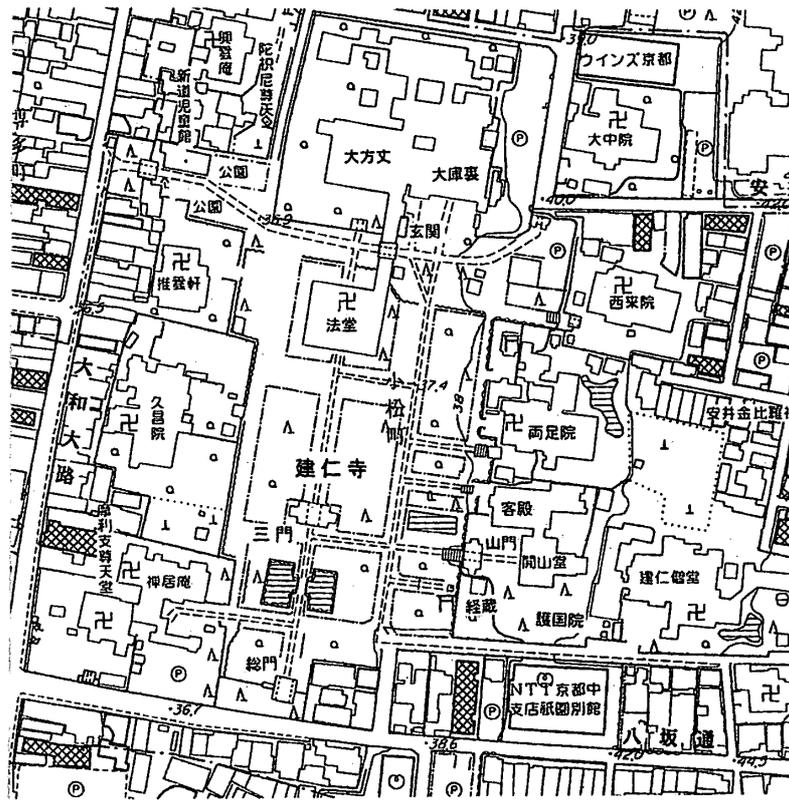
かにも可然様に可申付候事

一、何れもわきばらの子ども能様二きも入可遣候 以上

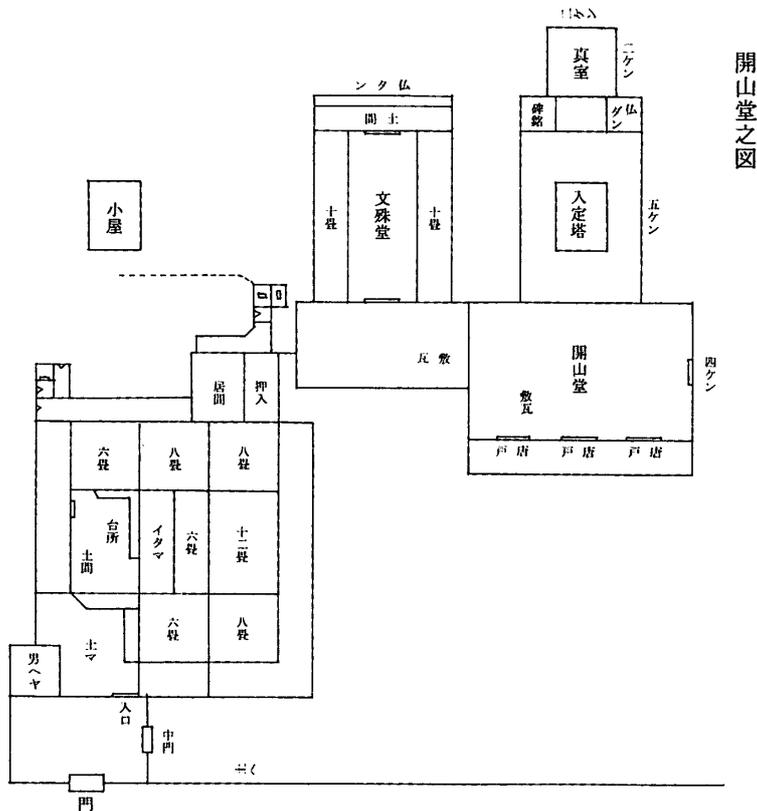
元和貳年

十一月

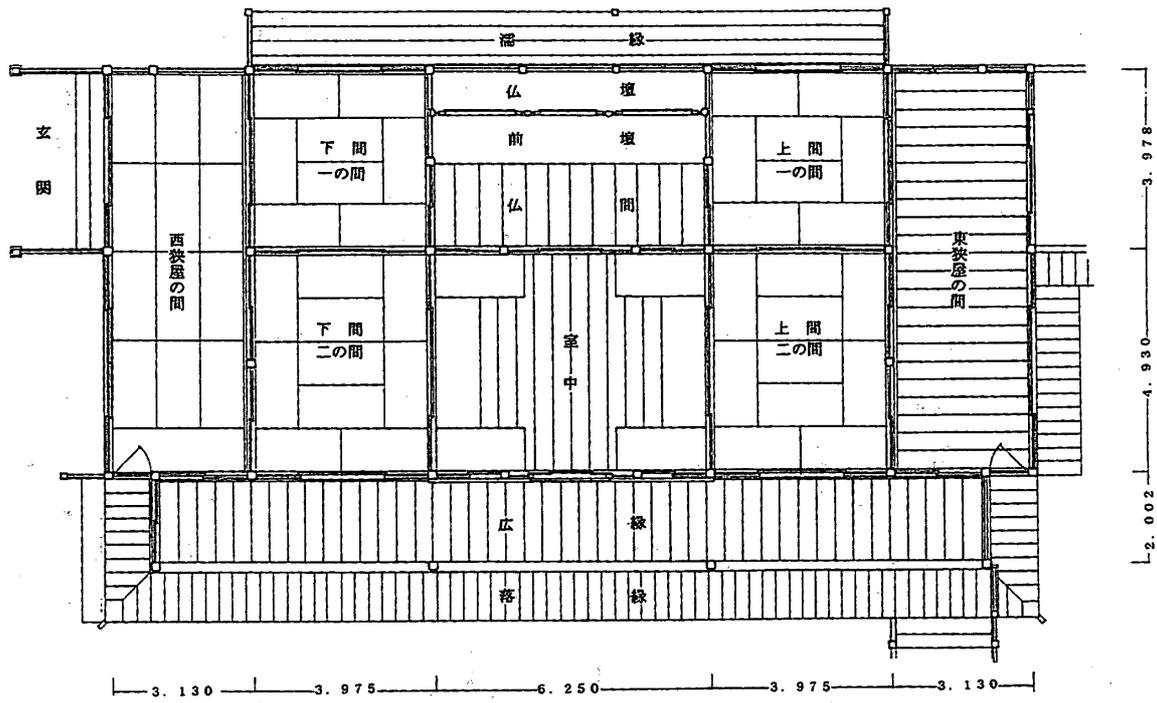
正俊



図一、建仁寺境内現況図

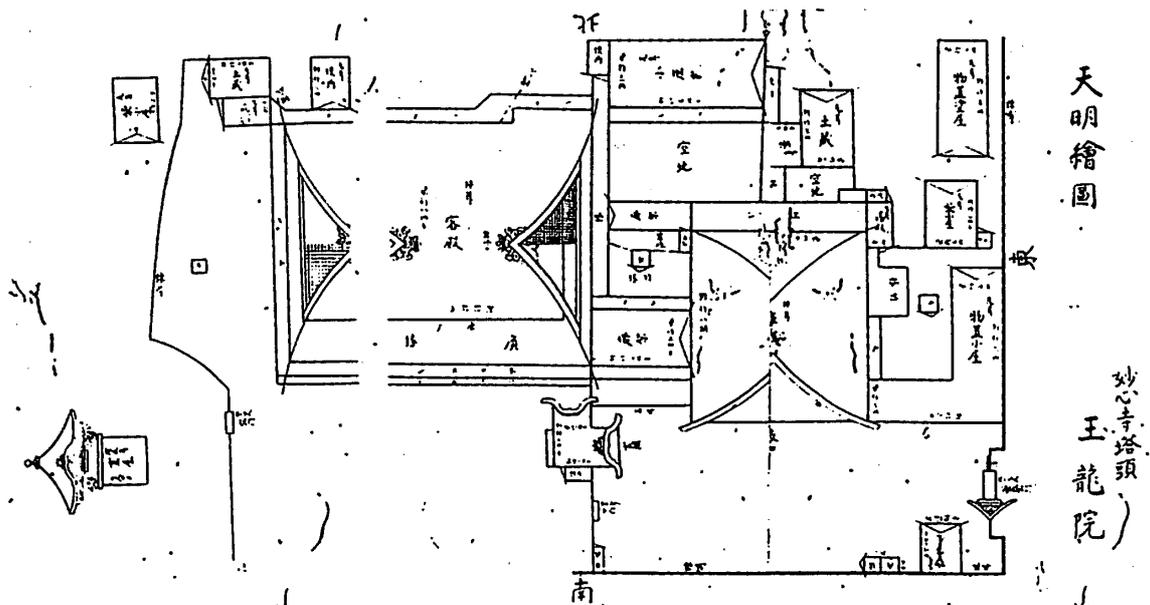


図二、建仁寺開山堂旧図

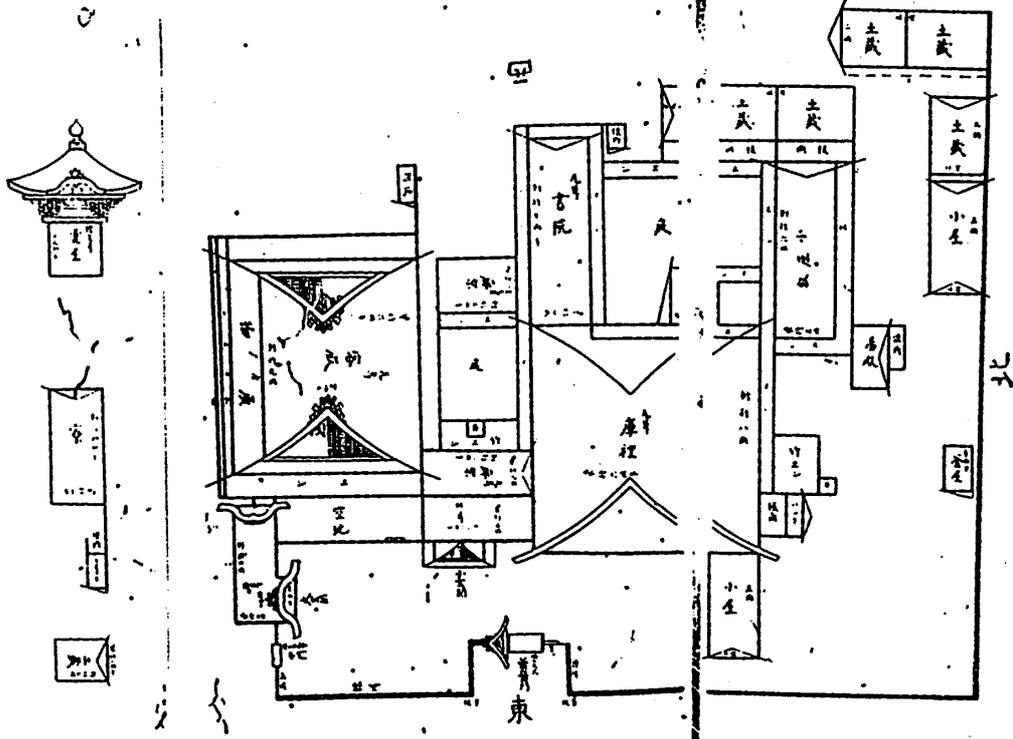


護国院客殿平面図

図三



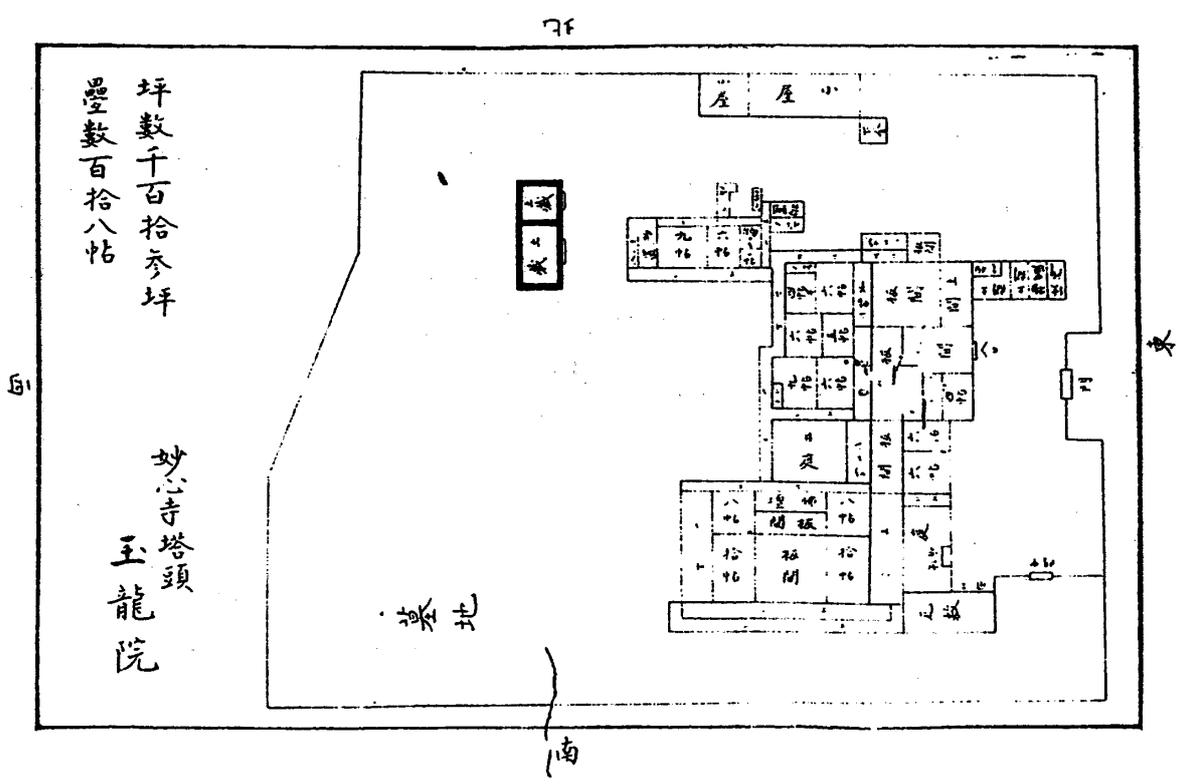
図四



新繪圖

妙心寺塔頭
玉龍院

圖五



圖六

建仁寺護国院開山堂障壁画（上）

—加藤文麗と原在中—

中谷伸生

一 文麗と在中の年譜

臨濟宗建仁寺派の建仁寺護国院開山堂には、加藤文麗（一七〇七—一七八二）と原在中（一七五〇—一八三七）の襖絵および杉戸絵が遺存している。開山堂はもともと文化二年（一八〇五）に再建された妙心寺玉龍院の方丈を、明治十年（一八七七）に現在地に移築したものである。玉龍院の方丈は文化二年（一八〇五）に再建されており、その再建が加藤文麗の没後であることから、文麗の襖絵は、どこか他の寺院等から持ってきたものだと考えられるが、それについては不明である。障壁画には落款があり、「従五位下伊豫守入道藤文麗都」と記されている。原在中の場合には、再建時に存命中であることから、もともと方丈の襖絵であった可能性も考えられ、もしそうだとすると、移築に際して破棄された襖絵部分に、文麗の襖絵が嵌められ、残りの襖絵、あるいは杉戸絵を、新たに原在中が担当し完成させたということになるが、これまた不明である。

加藤文麗については、奥平俊六氏の紹介があり、それをういつつ、以下に詳細を記すことにする。^①ところで、文麗の年譜については、『寛政重修諸家譜』巻七七五に詳しいが、それによると、「加藤泰都、織之助、左兵衛、伊豫守、従五位下、致仕号豫斎、実は加藤遠江守泰恒が六男。母

は某氏。泰茂が養子となる」と記されていることなどから、文麗は宝永三年（一七〇六）、伊予大洲城主の加藤遠江守泰恒の六男として生れ、名を泰都、号を予斎という。九歳の年の正徳四年（一七一四）に寄合に列せられ、享保七年（一七二二）に初めて將軍吉宗にお目見えし、後に吉宗に仕えることになる。享保十六年（一七三一）に火事場見廻の役につき、翌十七年に御使番となった。寛保三年（一七四三）には新番の頭となつて、寛延二年（一七四九）に戸田大炊頭忠言大坂定番となる。翌寛延三年（一七五〇）夏には西城御小姓組番頭となつて、同年末には従五位下伊予守となる。妻は大奥の老女外山の養女で、後妻が太田備中守資晴の女であつた。將軍吉宗没後の宝暦三年に隠居して、天明二年（一七八二）三月七日に死去、享年七十七歳であつた。文化十五年（一八一八）刊の『江戸諸名家墓所一覽』に「加藤豫斎、名泰都称文麗、天明二年三月五日、光林寺」と記されていることから、墓所は麻布の光林寺であることが判明する。また、実父の加藤泰恒は、木挽町狩野家の常信に絵画を学んでおり、その流れから、文麗もまた木挽町の狩野周信に師事していた。『古画備考』には「周信門人」と記されている。妙心寺塔頭には木挽町狩野家の障壁画が多数遺存していることから、そしてまた、この開山堂が妙心寺玉龍院の方丈を移築したものであることから、この文麗の障壁画は、妙心寺のいずれかの塔頭から移された可能性を捨てきれない。野村文紹の『写山楼の記』には「狩野如川周信門弟加藤文麗門弟谷文晁」と記されており、文麗門に谷文晁がいたことも明らかにする。加えて、『画乗要略』には「加藤文麗、名泰都、任伊豫守、江戸人、学狩野氏、後稍変体」と記され、推測するところ、狩野派の作風から出発しな

がら、後には作風の幅を広げていったと考えられる。これについては、奥平俊六氏が、隠居後の文麗が狩野派に禅味を加えて、のびやかな作風へと向かったと推測されているが、実際のところ、どうだろうか。^⑧

さて、続いて原在中の年譜に言及するが、在中については、すでに知られていることが多々あるため、その略年譜を簡潔に記すにとどめたい。在中は寛延三年（一七五〇）に京都の酒造家に生れ、小川通中立売上ルで暮らした。名は致遠、字は子重、別号は臥遊といい、石田幽汀の門人であり、同門の円山応挙からも大きな影響を受けたといわれる。また、仏画を山本探淵から学び、中国絵画、中でも京都の社寺に所蔵される明の絵画を独学しつつ、狩野派・土佐派をはじめとして、江戸後期の諸流派を学んで、緻密かつ華やかな作風で原派を興した。山水・動物・花鳥など、あらゆるジャンルを手がけ、有職故実についても造詣が深く、宮廷との関係も密で、寛政度造宮御所の障壁画の制作に加わって活躍した。天保八年（一八三七）死去。享年八十八歳。（作品解説、障壁画全図など、次号につづく）。



文麗

A 3

A 2

一五二



文麗

A 2



A 3



文麗

A15

A14

A13

一四三



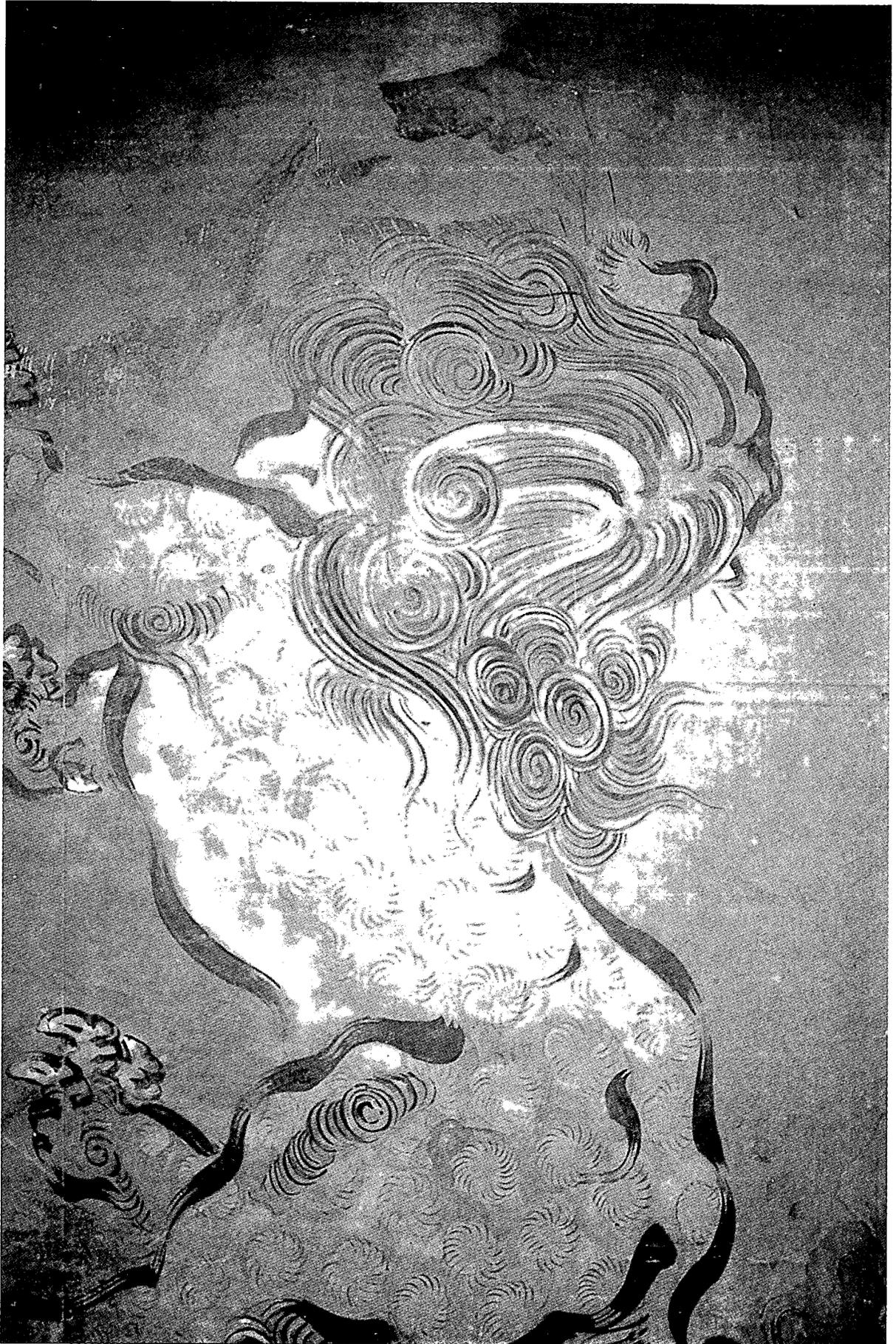
文麗

A14



A13





文麗

B13





在中

C11



C11



在中

C15

一五九



在中

D 3

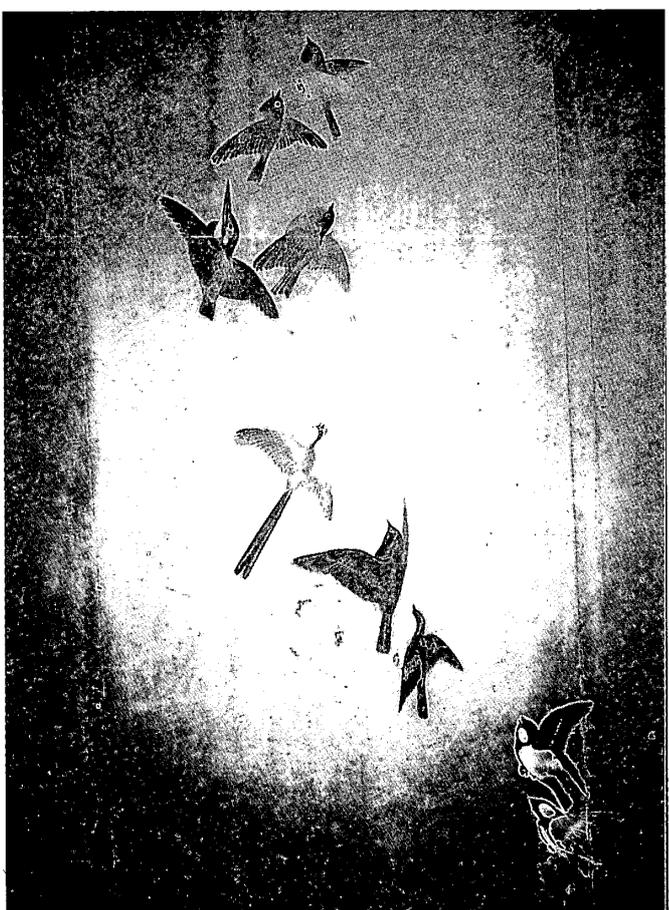


D 2

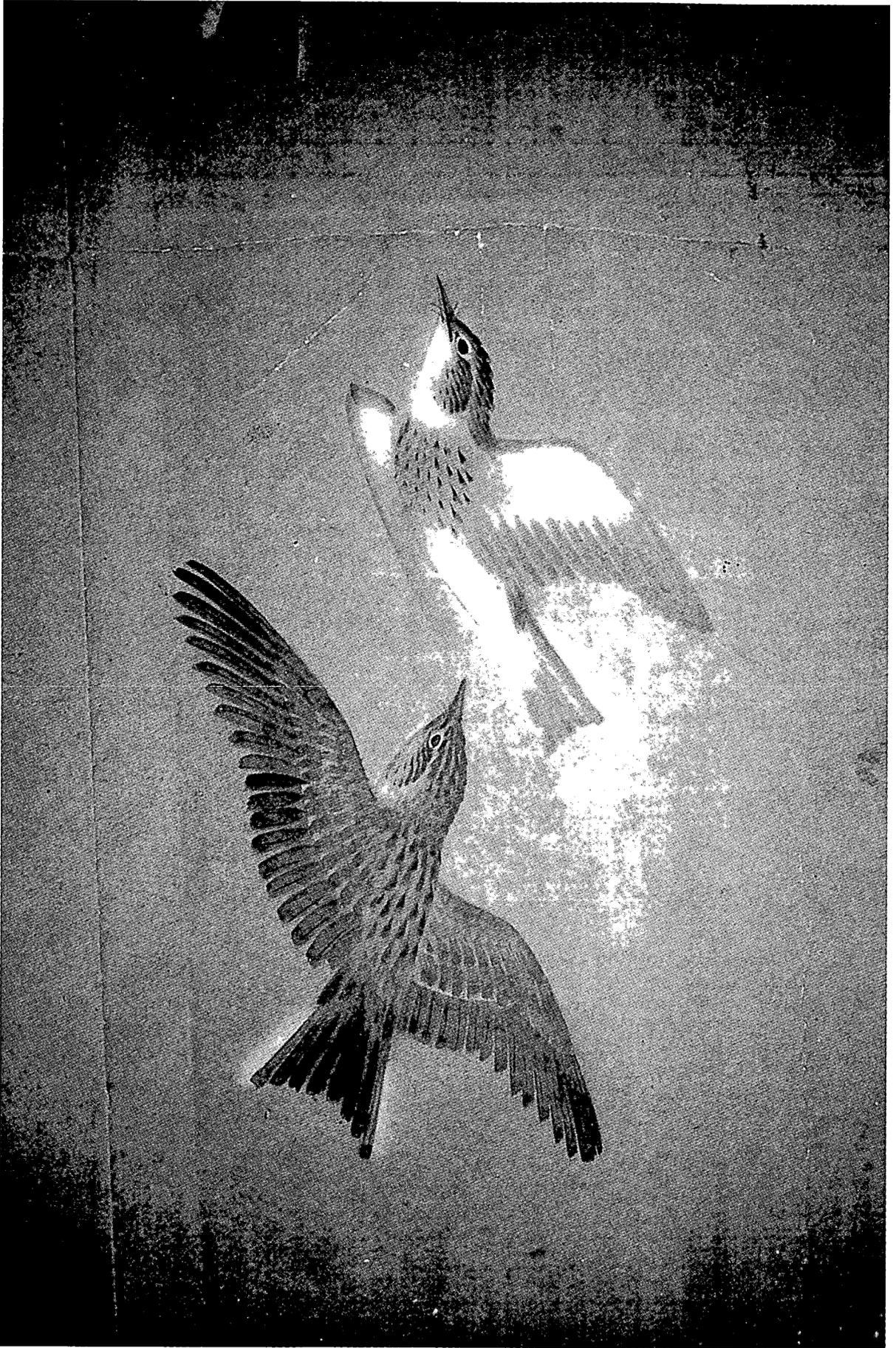


在中

D 7



D 6



在中

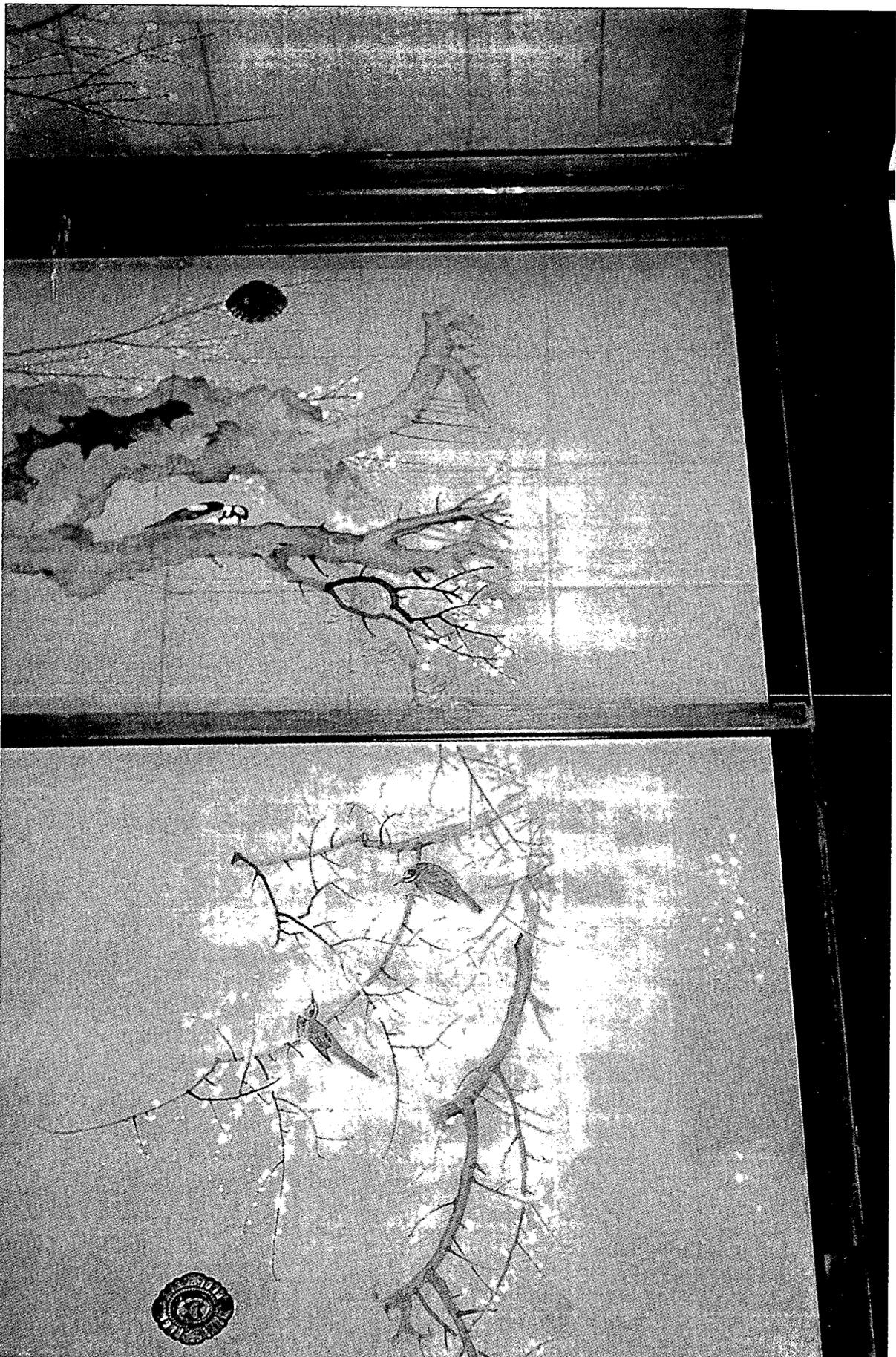
D7



在中

D10

一六三



在中

D12

D11



在中

D11

一六五

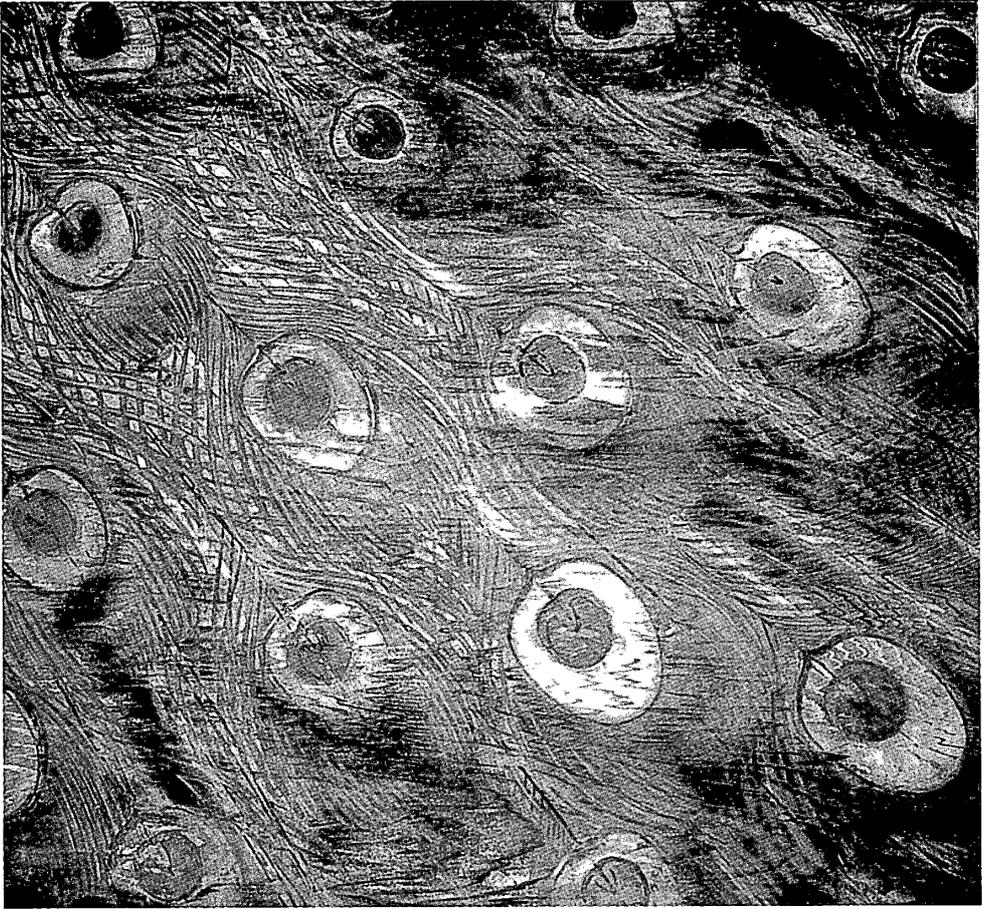


在中

D12

在中

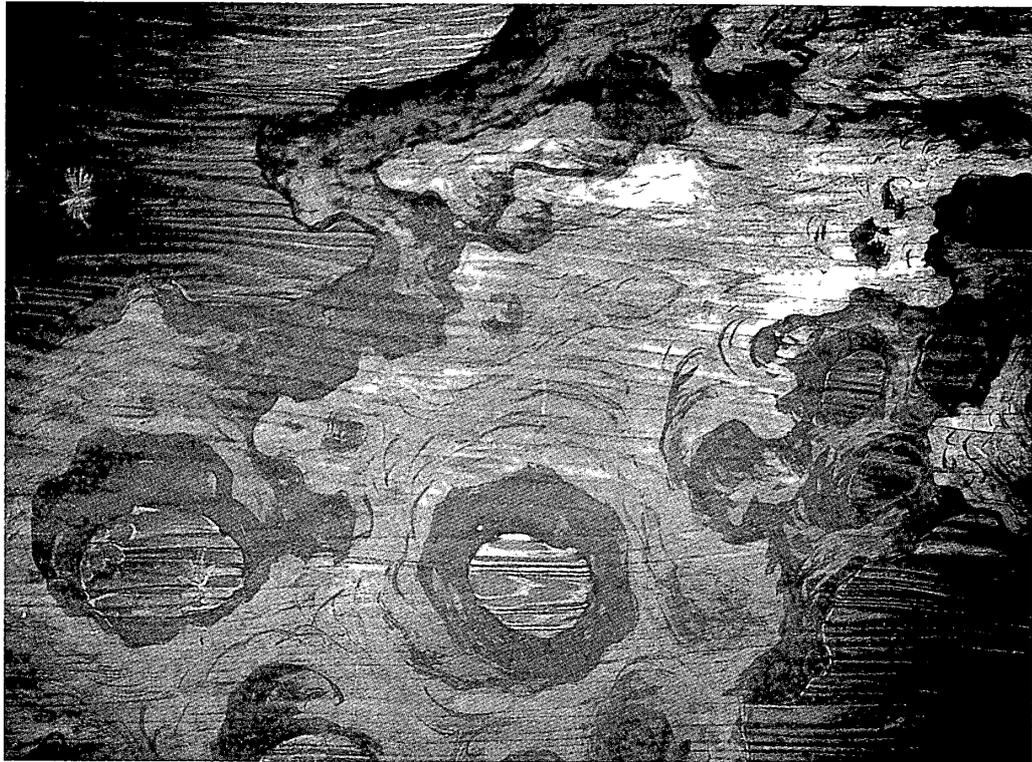
F



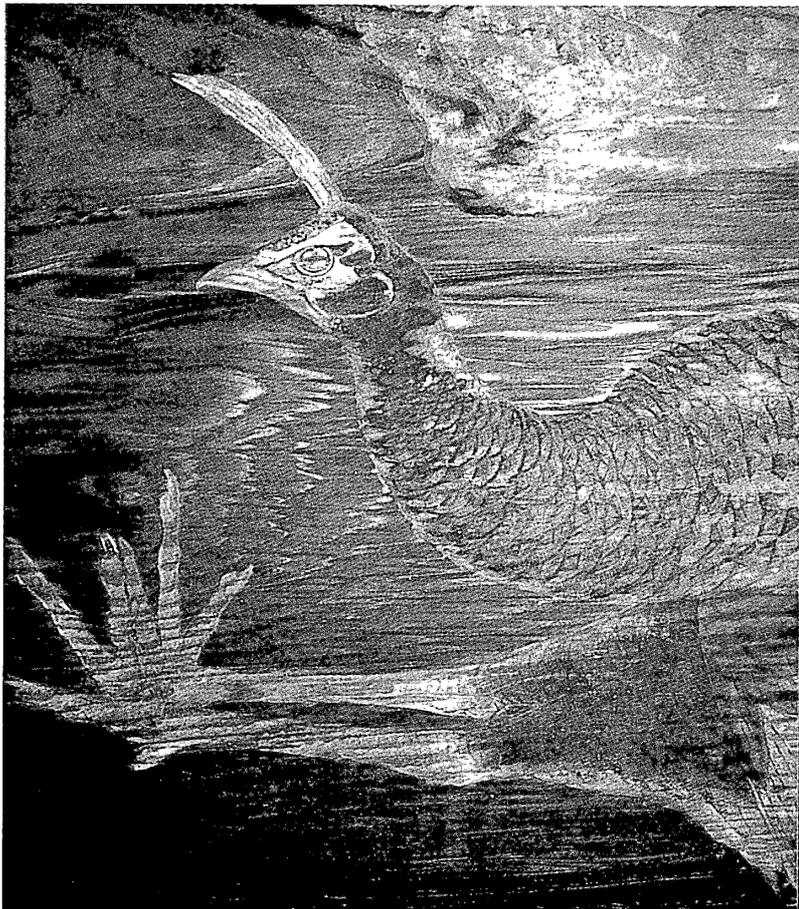
F

在中

I



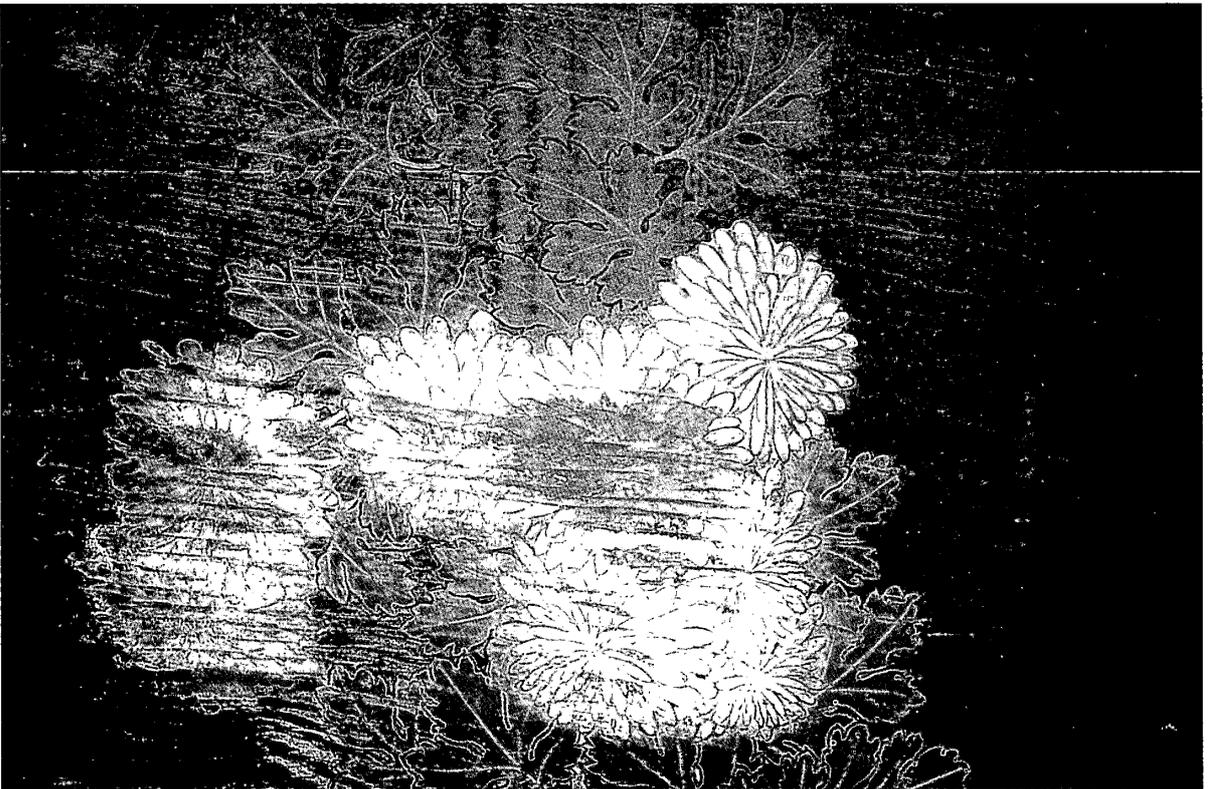
I





在中

丁



丁

一六九



在中

K

